

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2005/12 第35号

暗闇から突然・・・

日本ホテルの会理事 井上 務

「君たち、静かに!」。暗闇から突然、オジサンの声が響きました。

ここは東京・青梅。飛び交うホテルに「キャー、きれい」「すごい」と子供達が大歓声をあげていました。そんな子供達からは全く見えない位置(オジサンは川に下りて写真撮影中)からの一喝でしたから子供達はビックリ。私もビックリ。でもオジサン「君達、周りをヨーク見て御覧、オウチがあるでしょう、もっと静かにしないと…」と、さっきとは打って変わった優しい口調で子供達を諭しました。お母さん達からは「すみませーん」との声。そしてその直後「チョットあんた達、静かにしなさいヨ!」と今度は、お母さんからの鋭い叱責が子供達に向けられていました。こんな風にして周辺は静寂に。子供達はその後、オジサン・お母さんからの「静かに!」をしっかりと実行しつつ、ホテルを見つけては子供らしさを発揮しながら元気に“静かに”走り回っていました。

そんな事があった翌週、同じ青梅の別の場

所に「日本ホテルの会」のFさんの案内で出かけました。そして、Fさんの自然な振る舞いからホテル観賞に当たっての大事なマナーを学びました。Fさんは①明るいうちに現地に行く②現地に着いたら車は直ちに反転させるという2点を心掛けていたようでした。①の理由は、日没前の明るいうちにホテル観賞場所に着けば車のライトを点灯する必要がなく、ホテルに負担をかけずに済むというわけです。②の車を反転させておくのは、ホテルの観賞を終えて帰る際、当然ですが周辺は暗くなっていますので車のライトを点灯せざるを得ません、しかし、到着と同時に反転されている車はホテルが舞う場所に向かってライトを照らさずに済むというわけでした。

もちろん車はホテルが舞う場所からは相当離れた場所に駐車。そこでFさんは「日没前に現地に到着、だんだんと暗くなってくる空を見上げながら、そろそろかな? なんて言いながら一番ホテルを探すのって素敵じゃありませんか!」とつぶやきました。19時30

分をほんのちょっと過ぎた時、一番ボタルがスーッと飛び立ちました。見上げた空の色は濃い青紫色でした。確かに素敵で幽玄な一瞬でした。

さて、ホタルに係わったことのある方の多くは「君たち、静かに！」と叫んだオジサンと同じ思いに駆られた経験があると思います。「ホタルを持ち帰らないで!」「懐中電灯は足下だけにしてホタルを照らさないで!」「カメラのフラッシュはご遠慮下さい」等々…。

以前、新聞の投稿欄に「なぜごみ捨てる、桜好きな日本人」と題する文を見つけ、ホタル

観賞にも通じる事だと感じ切り抜きました。ジョエルさんという方は「私は日本の桜が大好きだ」で始まり「私は“世の中にたえてさくらのなかりせば 春の心はのどけからまし”という在原業平が詠んだ和歌が好きだ。日本人の桜を愛する心情と、その桜のそばにごみを捨てても平気な気持ちは相いれないはずだ。桜の名所にごみを捨てることは絶対にやめてほしい」と結ばれていました。私は“桜”を“ホタル”に換えて読んでいました。

オジサン、Fさん、そして投稿文に触発され、今回はマナーについて考えてみました。

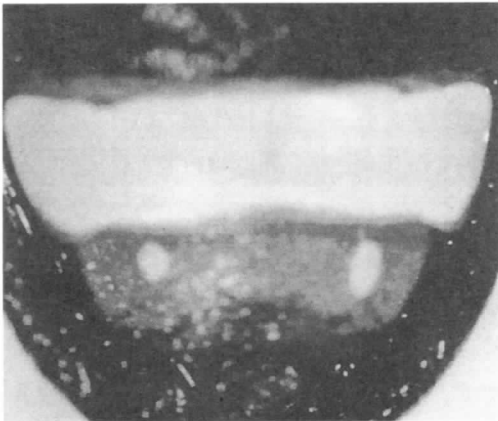


写真1



写真2

余談：ホタルに配慮しながら観賞したご褒美でしょうか！？ 青梅でたまたま手にしたホタルに以前から気になっていた現象を見つけました(写真1)。八王子で見つけた変異(写真2)をこれまでは特別なものと考えていましたが、同様の変化を別の場所(青梅)で見つけたので紹介させて頂きました。

クロツヤムシの家族生活

日本ホタルの会理事 常喜 豊

「熱帯」と言えば、ホタルの会の皆さんはすぐ、1本の木に群がってクリスマスツリーのように光る同時明滅ホタルや、奇怪な姿をした三葉虫型ベニボタルなどを思い浮かべるだろう。確かにそれらの昆虫も面白いが、熱帯には他にも興味深い昆虫がたくさんいる。

今回お話しする「クロツヤムシ」という甲虫もそのひとつである(写真1)。クロツヤムシは、外見は黒または褐色の体色でクワガタムシの雌に似ており(ゴキブリに似ていると言う人もいる)、あまり目立たない存在だが、森林の倒木の中に雌雄ペアでトンネルを掘り、幼虫を育てて家族で暮らすという興味深い生態をもっている。



写真1 倒木の上を歩くクロツヤムシの1種(ボルネオにて)

クロツヤムシは、分類学上は甲虫目、コガネムシ上科に属する「クロツヤムシ科」甲虫の総称である。湿潤熱帯の森林地域を中心に分布しており、世界中から約700種が知られている。日本には、ツノクロツヤムシただ1

種が分布しているが、四国と九州の一部に生息し、一生のほとんどを倒木の中ですごすために、そばにいても全く気づいていない人も多いだろう。

クロツヤムシ類が最も多く生活するのは、湿潤熱帯のジャングルである。ほとんどの種では、林床の倒木に雌雄1対の成虫(両親にあたる)がトンネルを掘って「家」を作る。トンネルが十分長く掘られ、「家」の基礎が出来上がると、雌雄は交尾を行ない、産卵する。卵はトンネル内の、木屑と糞を敷き詰めたものの上に産まれる。糞というときたないイメージがあるが、食材性昆虫の糞は見かけは木屑と大差なく、後で述べるように栄養分が豊富で幼虫の餌にさえなる。1日に産まれる卵の数は2~6個といわれ、これは何十個、何百個という数の卵を産むのが普通の昆虫類としては極めて少ない数である。哺乳類などでよくみられる、少なく産んで大切に育てる「少産・保護戦略」の例だと考えられる。雌は何日かにわたって産卵を行なうが、トンネル内に同時に見られる卵はせいぜい10個程度である。卵は黒褐色ないし濃い緑褐色で硬く、丈夫な印象を受けるが、これは危険を感じたとき親成虫が大あごで卵をくわえて持ち運ぶためとの説がある。

卵は約2週間で孵化すると考えられている。1つのコロニー(家)で同時に見られる幼虫の数は、やはり10匹以内の場合が多い。

幼虫の大あごは、カブトムシやクワガタムシの幼虫と比べて弱々しく、ほとんどの種では自力で木をかじって食べることができない。このため、親成虫はトンネルの内壁をかじって木屑を作り、幼虫はこの木屑と成虫の糞が混じったものを食べて成長する。「糞を食べる」というのはどうもイメージが良くないが、①栄養分に乏しい木材に窒素分を多く混ぜられる、②木材の主成分であるセルロースやリグニンを分解してくれる腸内共生微生物を糞を介して親から子に受け渡す、など、クロツヤムシの生活において重要な意味もっている。ある研究では、単に細かく砕いた木屑を幼虫に与えるだけでは不十分で、糞をまぜなければ幼虫は育たないという。

幼虫は2回脱皮し、3令が終令幼虫となる。幼虫期間は約2ヶ月と、やはりクワガタムシやコガネムシ類と比べて驚くほど短い。十分に餌を食べた幼虫は、トンネル内に繭状の蛹室を作り、その中で蛹になるが、この際にも親成虫が蛹室作りを手伝ってやるという。

蛹から羽化した新成虫は、まだ柔らかくてオレンジ色をしている状態で、トンネル内で木屑を食べ始める。摂食を続けるうちに体の色は次第に赤褐色から黒色へと変化していき、外骨格も厚く硬くなる。外骨格が完全に硬くなるまでに2ヶ月から3ヶ月を要するが、これは幼虫期間とは逆に驚くほど長い。体重も羽化直後の3倍ほどになるというから、何とクロツヤムシは成虫の形になってからもどんどん成長し続けるのだ。

新成虫がコロニーにとどまっている間に次の子育てが始まるので、新成虫は自分の弟・妹にあたる幼虫と共存することが多い(写真2)。この間、彼らがかじって作る木屑の一



写真2 クロツヤムシの家族。両端に2頭の親成虫、その間に赤褐色の新成虫、さらに2匹の次世代幼虫が見える(ボルネオにて)。

部は幼虫の食物になり、また成長した弟・妹たちの蛹室作りを新成虫が手伝うこともあるという。したがって彼らは単なる「居候」ではなく、両親の仕事を立て派に手伝っているわけだ。そして、外骨格が完全に硬化して一人前になった新成虫は、なおしばらく親元にとどまったのち「家」を離れ、どこかの倒木で新しい家庭を築いていくのである。

このようにクロツヤムシの家族生活は、たとえ偶然にしても我々人間の暮らしと驚くほど似通っていて、感動的である。この愛すべき昆虫の生態を、これからも調べていこうと思っている。

「ぐんま昆虫の森」見学バスツアーに参加して

むらやまホテルを育てる会 外立政隆

11月12日「日本ホテルの会」の主催による「ぐんま昆虫の森」見学バスツアーが行われた。前日からの雨が朝まで残り、空模様が心配されたがバスの出発する8時半には、雨も上がり、先行き良いバス旅行になると期待が高まった。この日の参加者は、大人21名、子ども5名の総勢26名であった。生きた昆虫が見られると言うことで孫を連れて行くことにした。孫は、1才10ヶ月で親から離れてジジ、ババと旅行するのが初めてである。バスは、昭島里川螢の会長さんでこのバスの添乗員として乗っておられる山本矩正さんの名調子の案内で一路、群馬に向かった。入間ICから圏央道を通り関越高速道路に入ってから、今回の目的地「ぐんま昆虫の森」の紹介ビデオが放映された。48ヘクタールの広大な敷地、ガラス張りの大きなイベント広場での開園式、蝶の舞う温室、花の咲くフィールドなどが次々と映し出され、期待が膨らんだ。関越高速、北関東高速を通過して赤城山の山麓に位置する「ぐんま昆虫の森」に着いた時は11時過ぎ、駐車場で日本ホテルの会の川村理事さん達と合流して地元おすすめの和風レストラン「大釜」に行き、昼食を取った。和風レストラン「大釜」のおすすめ品は、ソバとうどんでいずれも2人前ぐらいの大盛りで味も大変おいしかった。昼食を終わって昆虫の森に帰ると矢島稔先生が我々を出迎えて来ておられた。著名な矢島園長じきじきの案



内に参加者は、恐縮しながら園内に入った。

最初の見学は、西表島の蝶を育てている食草育成温室で餌の葉を食べる幼虫、飛翔している成虫等を間近に見ることができた。1才の孫が初めて見る蝶に「すーげえ、でっけー」と歓声をあげて、そこを動かそうとしなかった。それから富士山沼澤ゾーンの散策道を歩き、赤トンボの飛んでいるピオトープを見て、かやぶき民家に至り、わら鉄砲作りを体験した。かやぶき民家は、母屋屋根の全面の中央を凹型に切り落とし2階部分に風や日光を入れて養蚕室に使っていたと言う、この地方特有の赤城山麓型の民家であると案内板に出ていた。わら鉄砲は、一束(直径10cm程)の稲わらを縄で強く束ね、穂先の方を持って地面に強く叩き下ろし、その時の音を楽しむ子どもの遊びである。

最後の見学は、大きなテントウムシを思わせる3階建の本館に入り、亜熱帯の蝶がたくさん飛んでいる生態温室、昆虫写真展示室、昆虫クラフト室、図書館等を見て周り、迷路

の様な通路と階段に迷いながら、大スクリーンのある映像ホール(講堂)にたどり着いた。そこで矢島先生は、「ぐんま昆虫の森」を作られた目的や経緯をお話にされた。また自然界で生きている昆虫の拡大映像のビデオを大型画面いっぱいに写し、珍しい生態やメスを取り合うオスの戦いを見せてもらった。最後に矢島先生の講演があり、「今の子どもたちは、家に居てゲームを楽しみ、パソコンやテレビからいろんな知識を吸収しているが、野山に出て生き物の実物を見ることをしない。この昆虫の森では、園内で取った虫を観察してから逃がすという約束で捕虫網を貸し出し、自然の中で生きている虫を自分の手で触り、目で観察しながら、虫たちの肌の柔らか

さや体の仕組みを感じ取って生命の大切さを知ってもらおう体験の場です。子ども達に自然や生き物のすばらしさをもっと知ってもらい、興味を持ってもらいたいのです」と熱意を込めて話された。

このバスツアーに参加する前の孫は、絵本を見て「ちょうちょはどこにいる」の問に対し、指で蝶を指す程度の反応であったが、実物の蝶を見た後は、「これなあに？」と問うと「ちょうちょ」と答え、両腕を左右に大きく動かして体全体で羽の動きをまねる様になった。先生の言う実物を見て学ぶとはこういう事であると痛感した。機会があれば昆虫の多い季節に再度、孫を連れて訪れたいと思っている。

.....

事務局からのお知らせ

寄付金

次の方から寄付金をいただきました。この場を借りましてお礼申し上げます。

■浅倉繁春 様 (東京都)

ホタルのニュースレター (第35号) 2005年12月31日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 矢島 稔

156-0041 東京都世田谷区大原 2-17-6

ステーションプラザ代田橋 410

(株)オーグラム内 日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 03-3328-7379

e-mail : omata@nihon-hotaru.com

URL : <http://www.nihon-hotaru.com>

印刷 システム印刷株式会社

191-0031 東京都日野市高幡 1012-13

TEL : 042-591-1411 FAX : 042-591-7701

